

震災詠を詠む―見えないものへのまなざし―

田中 泉

「歌壇」3月号の特集「震災詠から見えてくるもの」では、東日本大震災の発生からの15年間で四つの期間に区切り、各期間の震災詠の特徴を四名の歌人が考察している。最後に、故郷の浪江町に通いつつ原発事故に向き合う歌を詠む、三原由紀子の論考「見えないものを見続ける」が置かれている。震災後1年以内の歌として阿木津英は、

腐敗して膨れて目玉も飛び出して あ
の子がいったい何をしたのか

千葉由起

など、「無残な死」を率直に端的に詠んだ歌を挙げる。映像では直接過ぎるものも、言葉で表現されれば、その無残な死が「いかに人の心に食い入り、食い破るものか」を受け止めることができる」と述べる。

震災後1年〜5年の間を、大松達知は「過去でも現在でもない、中途半端な時間感覚の中での日々」と見なす。さらに、経過した時間の長さは皆に等しい一方、その時間の「濃度」は、個人の震災体験の濃淡により差が大きい」と述べる。そして、

「サンイイチチのイベント」と声に出す人が集客の多寡を言ひつものりゆく
大口玲子
など、自らと他者の気持ちの隔たりに抱く違和感や怒り、驚きを表した歌を挙げています。
このような震災との「距離感」の差異は、震災後5年〜10年を経て、より明確になる。
梶原さい子は、

震災から明日で十年なんだねと月がきれいと
言うように子は 駒田晶子

などを挙げ、「震災直後とはまた異なる環境や心情、歌の方向性が窺える」と述べる。

そして、震災後10年〜今日。本田一弘は、震災の記憶がない生徒、変貌した風景、今もなお毎年行われる「集中搜索」などを詠んだ歌と共に、

だめですかあのころのことをわすれたら
思い出さないことがまだある 武山千鶴

を挙げ「ゆっくりと思いついて、それを言葉にすればいい」と述べる。震災や震災詠がモノのように消費される危惧もある中、そうし

た言葉は読み継がれていくはずだ、と。

この点は梶原が示す、明確な震災詠ではなくとも「震災によって生じた新たな死生観や、個人の中での何らかの変化は、歌に映り込んでいるのではないか」という見方にも通じる。つまり、明らかな震災詠ではなくとも、深いところで影響を受けた歌はあり、あるいは震災から長い年月を経て、心の奥底から生まれ出て来る言葉もあるのだ。そうした「見えないもの」への意識は、震災詠の変遷を捉えるだけではなく、現代の短歌を俯瞰する上でも重要であろう。

「文芸」2026年春季号の瀬戸夏子と青松輝による対談「『短歌ブーム以後』を俯瞰する―私性・テクスチャー・SNSをめぐって―」で、瀬戸は歌あるいは歌人同士の影響関係について次のように述べる。

あまり表面化していない影響こそ、短歌の歴史を繋いでいく時に大事になってくるんじゃないかと思うんですね。…中略…最初は目の前の一首しか見られていなかったのが、続けていくことで、もっと俯瞰的に見られるようになっていく。

災害や社会的状況と歌との関係についても、「あまり表面化していない影響」という見えないものへのまなざしを大事にしたい。